

準備委員会企画シンポジウム 3

福島第一原子力発電所事故がもたらした心理的被害について

【 企画趣旨 】

2011年3月に起こった東京電力福島第1原子力発電所の事故から6年以上が経過した。避難区域の多くで避難指示が解除され、住民の帰還がはじまっている。避難区域外でも、除染が進み、一見平常の生活が戻りつつある。しかし、チェルノブイリ事故後の調査結果によれば、subclinical なものではあるが、心理的影響が長期間継続することが知られている。また、幼い子どもを持つ母親に特に心理的影響が現れやすいこともわかっている。このシンポジウムでは、福島第一原子力発電所事故が、福島の親にもたらした心理的被害について検討することを目指し、4つの報告を行う。初めにその実態について、事故後継続的に福島県内の幼い子どもを持つ親を対象に、放射能に対する不安やストレスを調査してきた福島大学チームの調査結果にもとづいて報告する。2つ目に、親の不安やストレスが発達心理学的にもつであろう意味についての理論的考察と実証研究の結果を報告する。3つ目に、子どもの発達に及ぼす影響を防ぐための心理学的介入実践の試みを報告する。最後に、人々のリスク知覚に着目したリスクコミュニケーションのあり方について報告する。指定討論として、心理学的観点からチェルノブイリ事故後の被害住民の調査を行うとともに心理的影響のメカニズムについての研究と提言を行ってきたノルウェー技術工科大学の Britt-Marie Drottz-Sjoberg 教授を迎え、心理的影響の長期化や子どもの発達への影響を防ぐための方策について議論を深める。